



あかつきの夢の枕に雪積もりわが寝覚めとふ嶺の松風

源実朝

暦と旅。

- 02-3 立春から春分 ～二十四節気と日本の風習～
- 04 境内の草木花 「アシビ」/季節の和菓子「繭のカタチの白玉団子」
- 05 総代さんより
- 06-07 ワークショップ「蚕影神社参拝と繭・絹・香りの袋づくり」
- 08 古今のうた「旅」
- 09 本を読む 「旅を読む5冊」
- 10 祭りを旅する「秩父夜祭」
- 11 旅のエッセイ「旅の止まり木」
- 12 授与品の紹介ほか

春

立春 (りっしゅん)
雨水 (うすい)
啓蟄 (けいちつ)
春分 (しゅんぶん)
清明 (せいめい)
穀雨 (こくう)

秋

立秋 (りっしゅう)
処暑 (しよしょ)
白露 (はくろ)
秋分 (しゅうぶん)
寒露 (かんろ)
霜降 (そうこう)

立春から春分

二十四節気と日本の風習 (一)

夏

立夏 (りつか)
小満 (しょうまん)
芒種 (ぼうしゅ)
夏至 (げし)
小暑 (しょうしよ)
大暑 (たいしよ)

冬

立冬 (りっとう)
小雪 (しょうせつ)
大雪 (たいせつ)
冬至 (とうじ)
小寒 (しょうかん)
大寒 (だいかん)

旧暦と二十四節気

旧暦は、太陽暦と太陰暦を組み合わせたものです。「太陽太陰暦」といわれます。明治五年まで、長い間人々が暮らしの中で親しんできた暦です。旧暦では、月日は月の満ち欠けによる「太陰暦」で定められ(新月の日が毎月一日)ていました。また、季節の変化の指標とするため、太陽暦の一年を四等分した春夏秋冬のほか、二十四等分した「二十四節気」、七十二等分した「七十二候」が使われていました。

「二十四節気」は、一年を二十四に等分したその区切りと区切られた期間とにつけられた名称です。立春から始まり、春分、夏至、秋分、当時の「二至二分(にしにぶん)」に春夏秋冬それぞれを盛りを迎え、大寒で締めくくられ一年となります。立春、立夏、立秋、立冬がそれぞれの時期のはじまりで四立(しりゅう)と言い、二至二分と合わせて八節とされます。

季節の移ろいの中で、人々は風や温度や風景の変化など、自然を肌で感じながら生活の中に取り入れ、農作業などの仕事のサイクル、年中行事や祭りごと、旬の食材を使った食文化、季節語を取り入れた和歌や物語まで様々な文化を豊かに育んできたのです。

りっしゅん

立春

(新暦二月四〜八日頃)

「春の気、立つをもつてなり」*

(※『こよみ便覧』江戸時代の暦の解説書より。以下、「」*内同じ。)

◇寒さも峠を越え、暖かい春風が吹いて初めて春の気配が感じられるころ。この季節から数えて最初に吹く風が春一番。

「福茶(ふくちや)」…黒豆、結び昆布、梅干し、山椒などを入れたお茶。正月や節分に飲んで無病息災を願う。

「初牛(はつうま)」…二月最初の午の日。稲荷社の祭りの日である。この日、稲荷社に稲荷様のお使いである狐の好物といわれる油揚げや油揚げに寿司を詰めたものを奉納した。

【旬の野菜】ほうれん草、にら



雨水

うすい

(新暦二月十九〜二十三日頃)

「陽気地上に発し、雪氷解けて雨水となればなり」*

◇陽気がよくなり、降る雪が雨へと変わり、氷が解け出すころ。農耕の準備を始める目安。

「浜下り(はまうり、はまおり)」…沖縄、鹿児島県の伝統行事。旧暦三月三日は、干満の差が最も大きい大潮であり、潮干狩りを楽しみ、御馳走を御神仏に供え、海水で身を清めて健康祈願をする風習。

【旬の野菜】クレソン、セロリ

けいちつ

啓蟄

(新暦三月五〜九日頃)

「陽気地中にうごき、ちぢまる虫、穴を開き出ればなり」*

◇陽気に誘われ、冬ごもり地中の虫がはい出してくるころ。

「事始(ことはじめ)」…旧暦の二月八日は一年の農作業や祭り事の準備を始める日。大切な日を邪魔する鬼を除けるニラや唐辛子を薫して吊るしたりした。

「十六団子の日」…旧暦三月一六日、春になり山から降りてくる田の神を迎えるために、米粉で作った団子を十六個供えるならわし。

【旬の野菜】セリ、菜の花

しゅんぶん

春分

(新暦三月二十〜二十四日頃)

「日、天の中を行きて昼夜等分の時なり」*

太陽が真東から昇って真西に沈み、昼夜がほぼ等しくなるころ。この時期は、二十四節気の大きな節目のひとつ。

【旬の野菜】うど、トマト

(参考) 矢嶋文子『旬のやさしい歳時記』(平成二十六年)主婦と生活社、白井名大『日本の七十二候を楽しむ―旧暦のある暮らし―』(平成二十五年)東邦出版



境内の草木花

アシビ（馬酔木）

磯の上に生うるあしびを手折らめど見すべき君はありと言わなくに
 大津皇女『万葉集』巻二（一四四）
 わが背子にわが恋ふらくは奥山のあしびの花のいま盛りなり
 作者不明『万葉集』巻十（一九〇三）

ツツジ科の低木。古く万葉仮名では「安之碑」、「安志妣」と書かれ、アシビと呼ばれていた。馬など動物がこれを食べるとふらつき、昏睡状態にま陥ることから「馬酔木」と名づけられた。馬などがアシビク（足痛）さまたたとえ、これが転じてアシビ、アセビになったという。このような毒性があるため、ウシコロシ、ウマクワズ、シカクワズなどの方言がある。また壺型の花からスズラン、チョウチンバナ、群がって咲く花を麦飯に見立てて、ムギメシバナ、ムギバナなどの名前がある。

【参考】深津正『植物和名の語源』（平成十二年）八坂書房一九八、一九九ページ

～季節のかんたん和菓子～ 「繭のカタチの豆腐入り白玉」

旧正月には、繭玉の形をした繭玉団子を柳などの木の枝に突き刺して、繭玉飾りを作ります。繭玉飾りの団子は米粉で作ることが多いそう。こちらは、繭玉のカタチの白玉団子です。弥生神社のワークショップのお茶菓子として作りました。豆腐たっぷりなのでヘルシー&柔らかです。以下、レシピです。



○材料：豆腐1.5丁、白玉粉1パック（200g）

1. 白玉粉に水切りしない豆腐を少しづつほぐしながら混ぜ込む。
2. 耳たぶぐらいの柔らかさになったら繭玉の形にする。
3. 沸騰したお湯で茹でる。白玉が浮き上がり数分したら網ですくう。

*すぐに冷水にさらすと、黄色くならず白色が保てます。

*二日ほど常温で置いてしまってもラップをかけておけば柔らかなまま美味しくいただけます。

小豆のせたり餡をからめたり蜜をかけたり塩茹でムカゴを添えたり。

総代さんより

「私と神社」

高橋利明

私が小学生の頃は、弥生神社の拝殿前より丹沢大山また裾野には厚木の市街地を望み、美しい眺めでした。今でも目に浮かびます。明治四十二年三月に国分、上今泉、柏ヶ谷、望地の四部落の鎮守様を合祀して創建され弥生神社誕生から一〇六年。そのような神社の総代になるとは思ってもいませんでした。今から十四年前に前任者の方より引き受け私も定年を迎える時期でしたので気持ち良くお受けしました。私も町内のボランティアでもして近所の方々とお付き合いを広げて楽しく過ごそうと思っていました。



平成27年12月1日 神宮大麻頒布始祭

総代になって初めての仕事は例大祭。右も左もわからず先輩方から一から教えていただき一年間の各行事等を把握することができるようになってきました。二年めに池田宮司が着任し年間行事が一つ増えまたひとつ増え現在の弥生神社の年間行事になっていきます。池田宮司が着任してから、薄暗い神社も囲いの木を伐採して、周りは明るくなり、拝殿の修理などで神社も一変し、参拝者も増加していき



平成27年12月6日

注連縄（しめなわ）奉製の集い



今では初詣には社務所の下の方段のところまで参拝者が並び、昔の弥生神社とは大違いです。これからも地域の方々に親しまれる神社になるように総代として頑張っていきたいと思っています。

蚕影神社参拝と繭・絹・香りのワークショップ

～蚕影信仰と繭に触れる～

十月三十一日と十一月二十二日に、香り袋づくりのワークショップを開催しました。弥生神社境内に鎮座する蚕影（こかげ）神社にちなんで、海老名の養蚕文化と蚕影信仰を知り、繭玉と絹布に触れるという催しです。

地域の方々の他、遠方からもご参加いただきました。蚕や香り、絹布などそれぞれに興味をお持ちの方々が集い、色とりどりの素敵な香り袋が次々と生まれました。皆さんが選ぶ布の柄、香り、箱を彩る和紙まで個性が表れて、できあがりの作品を見る面白さ、手作業の楽しさ味わいました。手縫い作業に最初戸惑っていた方々も、他の参加者さんに助けられたり、慣れるにつれて上手になり、積極的に工夫をしながら作業されていたのが印象的でした。

これを機に、かつて栄えた豊かな養蚕文化や蚕影神社の信仰に心を持っていただけたらと願いました。



↑上新粉で作った繭玉飾りと香り袋に添える繭玉。



↑蚕の本コーナー



↑香りのエッセンシャルオイル。各々の香りのポイントを書いたカードの上に並べました。



↓ワークショップに先立ち、蚕影神社を参拝。



←色とりどりの正絹の端切れコーナー。柄やシルクの手触りを楽しめます。



「絹と香りのワークシヨップ体験記」

秋も深まる十月末日、弥生神社で行われたワークシヨップに参加しました。テーマは境内にお祀りしている「蚕影神社」に関わるもので、繭と絹を使った香り袋の手作り体験です。

まずは弥生神社と蚕影神社にご参拝。本殿でしっかりお祓いして頂き、清浄な身となってからワークシヨップ会場の社務所にお邪魔しました。

会場内は各々の作業テーブルを挟んで、片側には香り袋用の各種絹布が置かれてとても華やかです。古着を紐解いた端切れという事ですがどれも綺麗な状態、そして様々な色や柄から選べるようになっていました。絹スペースの後ろには白い几帳が置かれ、清く厳かな和の雰囲気じわりとテンションが上がります。

そしてもう片方には肝心の香りのもと、アロマオイルとドライハーブが並んでいました。私が今まで神社でお授け頂いた香り袋という和風の香りが主でしたので、和の外見に洋の香りという組み合わせはとても斬新。馴染みやすくて使いやすそうで、嬉しいなあと思いました。

これらのほか、香り袋に添える本物の繭玉や、これらを納める小箱（外側を好きな和紙で飾れます）も準備して頂いており、香り袋を作るだけでなく、まるでひとつの作品を作り上げるようでした。

神社お手製のお菓子とお茶を頂きつつ、蚕影神社の御由緒をうかがった後に製作スタート。



まずは好きな柄の絹布、そしてそれに合う結び紐を選びます。布にはあらかじめチャコで縫うラインが引かれていて、手縫い〇年振りという私はとても助かりました……！

袋を縫い上げた後はアロマコーナーへ。ベースとなるドライラベンダー又は楠木チップを綿でくるみ、綿にアロマオイルを垂らします。オイルはベースに合うよう、二種類ほどをブレンドすると良い……といったブレンドの参考例が載るアロマテラピー本も準備して頂いてありました。

私はラベンダーに柑橘系の香りを合わせるのが好きなので、その組み合わせで挑戦します。オイルは多すぎても匂いがキツくなるだけなので、その配分は慎重に……その甲斐あり、ととても好みの香りが出来上がりました。

先ほど縫った絹袋に綿を入れ、結び紐で口を結んで完成です。ちょこんと可愛らしい和小物袋から甘く爽やかな香りが漂います。久々の手縫いが楽しく、神社のご好意もあり三つも作ってしまいました。

実は翌日に外国の方と会う約束があり、上手にできた分を土産にとお渡ししたらとても喜ばれました。香りが洋風な点が馴染みやすかった上に、可愛らしい和柄の袋が気に入ったようです。

日本人でも絹や繭玉に触れる機会が少ない昨今、こうしたワークシヨップに参加できて、昔に思いを寄せるとても和やかなひと時を過ごせました。是非また参加したいです。

（辻本 彩）

古今のうた

旅

「雪ふれる山の中に旅人ふしたる所」

あかつきの夢の枕に雪積もりわが寢覚めとふ嶺
の松風

源実朝

『金塊和歌集』五三〇

『暁方の旅寝の枕に雪が降りかかって、夢から覚めるとわが寢覚めを訪
い顔に嶺の松風が吹きおろしてくることだ』

この歌の前歌（五二九）は、「かたしきの衣でいたくさえわびぬ雪深
き世の嶺の松風」。この場面をこの歌は暁方に移すという趣向である。
夢うつつの境にある作者に、自然が呼びかけてくるといふ構想である
が、この作の外にも「梅が香を夢の枕に誘ひきて覚むる待ちける春の初
風」という一首が、この和歌集には収められている。（鎌田五郎『金塊
和歌集評釈』昭和五八年、風間書房、六一一ページ）

旅人が自然と接触することによって現実と知る、夢から現実への移行の瞬
間、目覚める瞬間の感覚が伝わってくる。旅の最中はとくに自然に接す
る五感が研ぎ澄まされるのかもしれない。

くれなゐのしづかなる雲線なして暮れゆかむとす印度の海は

斎藤茂吉『遍歴』（昭和二十三年）

夜をゆく者はあらざる町の果て鶯いろの靈が角曲がる

たま

辰巳康子『恐山からの手紙』（平成十二年）

濁流ははつるをしらず峡深く冬の水位をわれは旅する

高崎淳子『朧光亭日乗』（平成十八年）

古代ローマの上水道の址過ぎてひろびろと小麦畑つづける

アクワドゥツテ あと

扇畑忠雄『白い塔の下』（昭和六十三年）

鮭帰る三面川や越後びとの味覚が成ししこの氷頭の味なほ

ひず

橋本嘉典『無冠』

紀元前の石刻の葡萄ろうま市の今の町柱にまろらかに垂れて

岡本かの子『歌日記』（昭和十五年）

満月の下に境なくこぼるアラスカ的大海アラスカの陸

秋葉四郎『外樹』（平成十年）

北極は日の色にいまゆらぎつつ尽無量なる太陽の下

岡山たづ子『一直心』（昭和四十九年）

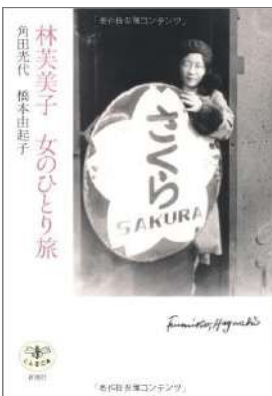


「旅」の誕生

平安-江戸時代の紀行文学を読む

倉本 一宏／著
河出書房新社
(2015.6)

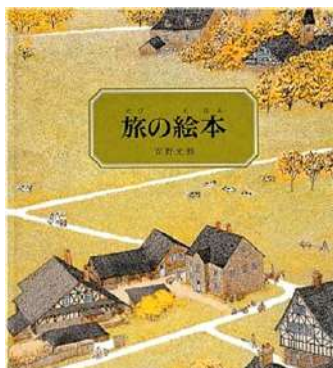
涙と辛苦の“移動”から、笑いと好奇心の“行楽”へ！平安から江戸時代まで東海道を旅した人々が残した紀行文学から「旅」の移り変わりを浮かび上がらせませう。『更級日記』など古代の旅は貴族の出張、『東海道中膝栗毛』など近世になると行楽に近い旅になるとのこと。



林芙美子 女のひとり旅

林 芙美子／[著]
角田 光代／[解説]著
橋本 由起子／[解説]著
新潮社
(2010.11)

尾道、パリ、屋久島、門司、稚内…旅する作家・林芙美子が人生の節目で旅し、愛した場所を、彼女の紀行文を読みながら辿ります。作家・角田光代が解説文を寄せています。



旅の絵本

安野 光雅／[著]
福音館書店
(1986)

旅の風景を描いた字のない絵本です。ぶどうの収穫、引っ越し、学校、水遊び…ヨーロッパの街並みと日常の風景がこと細かに美しく描かれています。よく絵を見てみると、皆が知っているおはなしの世界も登場。シリーズで8巻まで刊行されており、世界各地の風景が楽しめます。

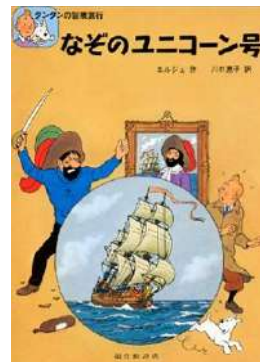
本を読む。

旅を読む5冊

今回は「旅」をキーワードに5冊を選んでみました。どの図書を読んでも旅の気分をあげることができる。

小河洋友

(東京都内図書館勤務)



タンタンの冒険旅行

なぞのユニコーン号

エルジェ／作
川口 恵子／訳
福音館書店
(1983.10)

チベットから南米、はては月世界まで冒険の旅へ！ニッカー・ボッカースタイルにくるつとはねた前髪でお馴染み、タンタンの物語です。世界50ヶ国以上で翻訳され、シリーズ累計販売総数は二億五千万部以上。2011年には『ユニコーン号の秘密』が映画化され話題になりました。



一生に一度だけの旅 GRANDE

極上の世界旅行

マーク・ベイカーほか[著]
関 利枝子／[訳]
北村 京子／[訳]
日経ナショナルジオグラフィック社 (2014.9)

大自然の驚異、都市の誘惑、地上の楽園…生涯忘れられない、一生に一度だけの旅を体験するにはどうすればいいの？迫力のある美しい写真と生き生きとした描写で「極上の旅」を実現できる400以上の旅先を紹介しています。



埼玉県秩父市秩父神社

「秩父夜祭」

十二月二日（宵まち）、三日に、秩父神社の御例祭が斎行された。毎年同日に行われる「秩父夜祭」には、多くの観光客も訪れ、町をあげての賑わいとなる。町中に所狭しと夜店が並び、盛大な花火が打ち上げられ、町は夜を徹して祭りを盛り上げる。三日の大祭の日に秩父を訪れた。

秩父神社と妙見菩薩（みょうけんぼさつ）

秩父神社の創建は崇神天皇期までさかのぼるが、鎌倉期には武神の「妙見菩薩」が合祀され、武士団の崇敬を集めた。妙見菩薩は北極星を神格化した神であり、養蚕の守り神ともいわれる女性の神である。秩父はかつて養蚕が盛んであり、秩父夜祭は「お蚕祭り」とも呼ばれていたそうである。同じく養蚕の地であったわが町海老名と蚕影（こかげ）神社を思い、親しみを感じた。

秩父夜祭は、秩父神社の女神と、秩父の霊山武甲山の男神との年に一度の逢瀬を表す「妙見祭」ともいわれる。このロマンチックないわれの他にもうひとつ、秩父の水の神への信仰を表す、この夜祭の根底にあるストーリーを伺い、感じ入った。それは、同市に鎮座する今宮神社の地に湧く「水」に始まる。

水の神、竜神と武甲山

今宮神社の境内にある「竜神池」は、武甲山を水源とする湧水である。毎年、四月四日に斎行される秩父神社の「御田植祭」では、この「竜神池」から水神を迎える神事が行われる。この水神を表す藁づくりの竜神が、御田植祭りで登場する。そして、秋の農の収穫期には、秩父夜祭における「御神幸（ごしんこう）行列」の先頭を行くのである。すなわち「春先に招迎した武甲山の竜神を初冬に歓送する」という祭りの意味がうかがえる。



みこし

三日の夜に神霊を遷した神輿が神社からお旅所まで渡御する。神職、神馬と御神幸行列が続いたのち、豪華絢爛な屋台や笠鉾が町を練り歩く。



今宮神社の御神木。水で潤う境内は清々しい空気に満ちていた。

人々の暮らしを支える水と源となる山。その恵みへの感謝と畏敬の念が、人々の水の神への信仰心、武甲山への信仰心を生み育んで、この盛大なお祭りの原動力になっているように感じた。また、暮らしの中で自然の循環や動力を感じ、そこに神を見出す人々の開かれた感性と心の豊かさや想像力を思った。

【参考】『秩父夜祭』監修 蘭田稔、さきたま出版会、平成十七年

旅の止まり木

谷口明子（陶芸家）



タジン鍋などのたたき売り（2012.4 モロッコ 筆者撮影）

今から約二十年前、大学生になりたての私は未だ日本を出たことも飛行機に乗ったこともなかった。学生のうちに必ずや海外旅行デビューをしたいが、最初はバックツアーでハワイなどが、最初はパックスアーでハワイなど初心者向けのところに行つて、慣れたから段階的にヨーロッパとかに広げていこう、個人旅行なんて英語と旅の達人でなければ無理・・・と極めて慎重に考えていた。しかしその矢先にある友人と出会い、まだそこまで親しくもなかったのに唐突に「タイに行こう」と誘われた。よくわからないながらも誘いを承諾してしまった結果、まもなくと旅道具を詰めた登山用のザックを背負い、航空券だけを握って宿も決めずにふたりでバンコクへ飛ぶこととなる。その友人というのは弥生神社の権禰宜である。しかもあるうことか彼女もこれが初海外初飛行機であつて、乗った飛行機が滑走路からふわりと浮かび上がった瞬間のはじけるような興奮顔は今も忘れられません。

で、この旅行から無事帰還できてしまったため、私はすっかり味をしめて、その後今日まで、時に権禰宜と、時に他の友人と、そして時にひとり、隙をみつければ国外逃亡を図るようになってしまった。

基本個人旅行なので観光バスで連れ

まわしてはもらえず、行きたいスポットには自分の足や現地の交通機関で行くことになるが、言葉も不如意で且つ、私は必ず道に迷うので、迷わない人の何倍もの総距離を歩き回ることになり、すごく疲れて茶店で休みたい・・・と思うが入りやすい店がない、じゃあ公園、と思うが強風が吹いていたりしてつらい、という状況で最適な止まり木はどこでしょう。それは寺院や教会であつた。礼拝の時間以外は異教徒であつても中に入れてくれて、すみっこに座つてしばらくじっとしていてもよかった。イスラムのモスクも然り。露出度の高い服装をせず、スカーフをかぶつて髪を隠せば、中に入つてじっとしていることができた。もちろん個々の寺院ごとにそのあたりのゆるさに違いはあるのだから、ああ意外とオープンなんだなあ、と思つた。

日本の神社仏閣もまた、時に海外から来たひとの止まり木になつていたりするのだろうか。最近、さまざまな安全上の問題から「出入り自由」がどんどん減っている気がするけれども、その国に根付いた宗教のたてものに、その宗教のことをよく知らない外国人も休憩がてら立ち入つていい、というゆるやかさは、どうかなくならないといいなと思つている。

授与品紹介

弥生神社の札所でお分けしている授与品です。当社オリジナルのデザインです。



「破魔矢」凡帳結び・菊結び・叶結びと、江戸打紐をひとつずつ結んで飾りました。



絹糸で結び絹布に包まれたほのかに香る、開運招福の「繭玉守り」
*香りのついた楠の木片も綿で包んで入れました。



羽ばたく鳥と桜咲く「合格守り」



梅の花と金銀赤の水引き模様
「心願成就守り」



ちよろ

私たちはかなり有名になって…お正月のちよろを期待しているんです。

あけましておめでとございます。本年もよろしくお願い申し上げます。
社務猫 ちよろ きーこ

私たち、あさひのオンラインショップの記事にも載せていただいたんです。

きーこ



社務猫のあいさつ

編集後記

あけましておめでとうございます。
本年もよろしくお願い申し上げます。
昨年一年、そして年末年始を迎えるにあたって多くの方々にご協力をいただきました。ありがとうございました。

今号も素敵な原稿を書いていただいた皆さまに心より感謝申し上げます。◆様々な「旅」のページから目の前が開くような突き抜けたような羽が生えたような感覚を新年早々、もっていただけたら幸いです。◆手探りで始めたワークショップ、大祓詞書写会では、参加者の皆さまによつて場も空間も作られていことを知りました。今年も創意工夫を重ねて興味深く素敵な企画をーと思います。掲示板や品などでお知らせします。◆秩父夜祭りにともない開催された「秩父夜祭フォーラム」では、地元の高校生によつて、秩父夜祭や、地元に残る方言、文化、自然の中での暮らしについて、「工」の視点を取り入れつつ、彼らの新鮮な体験と言葉を通して語られ、未来へつなぐことによる希望を感じました。◆旅をして、地域での暮らしやわが身をふり返る。そんな年にしたいと思います。



Facebook



Twitter

編集・発行 弥生神社

海老名市国分北一・三十三

表紙写真：弥生神社境内より夕景を望む（撮影 亀井久美子）